

宮本輝

# 道頓堀川



どうとんぼりかわ  
道頓堀川

みやもとてる  
宮本輝



角川文庫 5452

昭和五十八年五月二十五日 初版発行

発行者——角川春樹

発行所——株式会社角川書店

東京都千代田区富士見二—十三—三

電話東京二六五—七—一一（大代表）

千—〇二 振替東京③一九五二〇八

印刷所——旭印刷 製本所——多摩文庫

装幀者——杉浦康平

落丁・乱丁本はお取替えいたします。

定価はカバーに明記してあります。

Printed in Japan 0193-146902-0946(0)

# 道頓堀川

宮本輝



角川文庫 5452



三本足の犬が、通行人の足元を縫って歩いてきた。耳の垂れた、目も鼻も薄茶色の瘦せた赤犬だった。

まだ人通りもまばらな戒橋を南から北へと渡りきると、犬は歩を停めてうしろを振り返った。はがれちぎれて風化した夥しい数のポスターが欄干を覆い、たもとの、いつも日陰になっている一角から、小便や嘔吐物の湿っぽい悪臭がたちのぼっている。歓楽街の翳を宿して、流れるか流れないかの速度で西へ動いていく道頓堀川の水が、秋の朝日を吸っていた。

夜、幾つかの色あざやかな光彩がそのまわりに林立するとき、川は実像から無数の生あるものを奪い取る黯い鏡と化してしまう。不信や倦怠や情欲や野心や、その他まといっているさまざまな夾雑物をくるりと剥いで、鏡はくらがりの底に簡略な、実際の色や形よりもはるかに美しい虚像を映し出してみせる。だが、陽の明るいうちは、それは墨汁のような色をたたえてねっとり淀む巨大な泥溝である。

大阪市の中心を南北に流れる東横堀川は、西へほぼ直角に曲がりきって、そこで道頓堀川となり、歓楽街をつらぬきながら尻無川と名を変えて大阪湾へ落ちていく。あぶくこそ湧くことはないが、殆ど流れのない、粘りつくような光沢を放つ腐った運河なのであった。

邦彦はリバーの店先を掃きながら、三本足の犬を見ていた。バーや小料理屋の密集する通りの真ん中を浮浪者が歩いていて、その影が犬のところまで伸びてくる。犬は、遅れてついてくるまち子姐さんの姿を認めると、安心したように宗右衛門町筋へと道を折れ、またひょこたんひょこたんとして歩き始めた。まち子姐さんは浮浪者を避けて道の端を小走りですべて来、

「小太郎、気をつけんと、また車に轢かれるでエ」

と小さく叫び、邦彦に微笑みかけてきた。

「あの犬、小太郎いう名前にしたんか？」

自分の前で立ち停まったまち子姐さんに、邦彦はゆっくりした口調で訊いた。

「そうやねん。邦ちゃんこのマスターがつけてくれたんやで。凜々しい名前がええやろ言うて」

「へえ、小太郎で凜々しいかア？」

化粧を落としたまち子姐さんの顔は、血の気も薄く荒れていたが、剃り込んだ眉の跡がそこだけ蒼く艶を帯びている。邦彦は、このまち子姐さんの朝の顔に、ときおり強く心魅かれる。

夜、店に出る際の彼女は、どちらかというと薄化粧であったが、それが一瞥して極めて厚い化粧をどこしているような錯覚を与えるのは、一本もない眉を筆で細く濃く塗り描くからであった。その人工の漆黒な眉は、小づくりな童顔の中で浮きあがっていて、まち子姐さんの面だちを実際よりもあだっぽく見せてしまう。水商売の世界しか知らん女は、それはそれでものごう純なもんやと、リバーのマスターが語ったことがあったが、確かにまち子姐さんにひそむ純なものがその素顔の眉の剃り跡あたりに柔らかく光っているのを、邦彦はどうかした一瞬に見てしまうのだった。

「邦ちゃん、来年は卒業やなア」

とまち子姐さんは言った。

「お客さんに社長さんが多いから、就職のこと頼んであげよか？」

「そやけど、卒業できるかどうか判らへんしなア」

「どこぞのぼんぼんみたいなこと言うて……。余分な授業料、また自分で儲けんとあかんくせに」

小太郎と名づけられた犬は、ちようと太左衛門橋のたもとの四つ辻に坐り込んで、まち子姐さんを待っていた。邦彦は、心斎橋筋を横切って御堂筋の方へと歩いて行く浮浪者のうしろ姿をぼんやり追った。地下鉄の駅から溢れ出て来て北へ流れて行く勤め人の群れが、その浮浪者

の肩口あたりに垣間見えている。

「……ああ、眠たい」

小さく欠伸をして、まち子姐さんは日溜りの中にいる三本足の犬を指差した。

「けったいな子をしょいこんでしもたおかげで、眠とうてしょうがないわ。とにかく、朝いっぺん起きておしっことうんちをさせてやらんと、店の中でしてしまいうさかい」

欠伸のあとの涙が、まち子姐さんの目に滲んでいた。そしてその目をじっと邦彦に注いだ。それとよく似た、悲しくもないのになぜかむやみに濡れそぼっているような目を、この歓楽街に生きる人たちは、ときおり真っ向から浴びせかけてくるのである。

犬とまち子姐さんが四つ辻を左に曲がってしまうのを見届けると、邦彦は準備中と書かれた掛け札をドアのところにぶらさげて店内に入った。喫茶店リバーの開店は十一時である。マスターの武内がやって来る十時半までに、邦彦は店内の掃除を済ませて珈琲をたてておかねばならない。この朝の準備と、夕方五時から閉店の十時までが、邦彦の勤務時間なのであった。そして彼は、もともと物置として設けられていた二階の四畳半に、二年前から住まわせてもらいながら大学に通っていた。

リバーの内部は決して広くはなかったが、八人ほど坐れるカウンターと、大きな四人掛けのテーブルを三つ置いたきりのゆったりした配置であった。真ん中にマホガニーの頑丈な台があ

り、そこにいつも花が贅沢に盛られていた。日によって薔薇であったり百合であったりマーガレットであったり、さまざまに取り換えられるのだが、薔薇なら薔薇だけが、百合なら百合だけが、大きな花器に無造作に活けられているのだった。そしてそれはほぼ二日か三日おきぐらゐに惜しげもなく換えられる。壁には一か所造りつけの四角い穴があり、ギヤマンの小さな水差しがぽつんと飾られてあった。水差しは鮮やかな翡翠色で、丸い胴と異様に長い鶴首が、思わず見とれるほどにあでやかな曲線を作り出していた。それ以外、ほかには何も飾り物はなかった。そして、この店内にでんと咲き匂う花の塊りと、壁穴にさりげなく押し込められた翡翠色の見事なギヤマンが、ことし五十になる武内鉄男の、開店以来十年間リバーに注ぎつづけてきた愛情の表われなのであった。

準備をすべて済ませると、邦彦はテーブルに腰かけて煙草を喫った。川岸に改修工事が施されたのは二年前の昭和四十二年である。川岸に幅二メートルほどの芝生が敷かれ、ところどころ花壇も設けられた。月日が過ぎ、緑色の帯に鮮明にふちどられるようになって、川は逆にその汚れをいっそう深くしてしまった。

ガラス窓越しに戎橋を眺めていると、黄色い薔薇を山ほどかかえてやって来る武内鉄男の長身が見えた。邦彦は手を振ってみたが、ガラスが反射しているのか、武内からは見えないようであった。武内が橋の真ん中を過ぎた時点から、邦彦は一つ、二つと数をかぞえる。彼はとき

おりそうやって、武内が店内に入ってくるまでの時間を計ってみる。別段、何の理由もなく試みたいすらであったが、武内は五十一から五十三かぞえる間にリバーに入ってくる。それより早かったり、遅かったりしたことは一度もなかった。人通りの多い日も、どしゃ降りの日も、武内はいつも同じ歩調で、自分の店に出勤してくるのであった。

「あしたはどんな花にしようかと考えてるうちに寝そびれてしもた。花選びも二日置きとなると、楽しみを通り越して、もう苦しみみたいなもんやなァ」

入ってくるなり、武内はそう言って邦彦の向かい側に腰をおろした。

「花も高うなったし、もうこんなお遊びも、ええ加減にしとかんとあかなァ……」

武内は顔をしかめてみせたが、ひいきやく 鼯鼠客の多くは、贅沢に取り換えられるこのリバーの花を楽しみたい人たちなのであった。

「邦ちゃん、政夫はどないしてる？」

「きのう『紅白』におった筈はずやでェ。『ロンドン』のマスターと徹夜で勝負するんや言うて、ここで珈琲を飲んで行ったから」

坂町さかまちにあるロンドンというスナックのマスターは、競馬や麻雀マージャンやビリヤードなどの賭け事かどに興じているとき以外は、殆ど真面目な表情をしたことはない。いつも横目で人の顔を見やりながら、作り笑いを浮かべつつけている小太りの男であった。

邦彦は入れたての珈琲をカップに注ぎ、テーブルに運んだ。開店までの時間に、二人はいつもこうやって朝食をとるのである。邦彦がトーストにバターを塗ったり卵を焼いたりしている間に、武内は自己流の無造作な活け方で花を活ける。だがそこには武内独特の型と呼べるものがあった、一種類だけの手に余るほどの花の束が、いつも不思議な勢いとおさまりを保ちながら、ちゃんと花器の中で咲いてしまふのだった。

川ぞいの窓から差し込んでくる朝の光が、武内を照らしていて、それを邦彦はカウンターの中から見るともなしに見ていた。トーストの焼ける匂いと、珈琲ポットからのたてたばかりのほろ苦い香りが、邦彦のまわりに生温かくたちこめていたが、それは黙り込んでいるときの武内のうしろ姿からときおり浸み出てくる物憂い静寂みたいなものを、いやにはっきりと映し出していた。武内は、体つきは年齢よりもうんと若かったが、顔つきは実際よりかなり老けて見えた。そのバランスが、ふとしたひょうしに大きく崩れることがある。そんなときの武内は、若い役者がぎこちなく老け役を演じているようなある種の滑稽さを感じさせたり、それとはまったく逆に、老優が懸命に若者を演じようとしている際の、うらぶれた侘しさを垣間見せたりするのである。

武内鉄男が昭和二十四、五年から三十年代前半にかけて、ビリヤードの世界で名を馳せた男であることを邦彦に教えてくれたのは、「紅白」という玉突き屋の主人である。

「とにかくスリークッションでは、武内に勝てる奴は一人もおれへんかったんや。公式の試合でチャンピオンになったわけやないけど、歴代のチャンピオンも、武内鉄男にかかったら、まあ赤児同然やったやろなア」

紅白の主人の話によると、武内は一度もそうした公式戦に登場したことはなかったが、いわばその世界の陰の部分で生きた伝説的人物として、ビリヤード愛好者たちに知られているらしかった。ただし日頃の武内からは、往年の勝負師といった風情はどこにも見当たらなかった。たいして欲も持たない、小さなことにもこだわらない明るい男であった。それがたったひとつだけ、息子の政夫に対するときだけ、腹に一物を隠してじっと押さえ込んでいるような表情を、面長な顔全体に湧きあがらせてくる。

邦彦は、きょうこれから難波の駅で政夫と逢う約束になっていたが、それを武内に話すことは何となくはばかられる気がした。

「ことしは、お母さんの三回忌と違うか？」

花を活け終って、マホガニーの台に散った水滴を拭い取りながら、武内が言った。中学生のとき父を亡くした邦彦は、十九歳の冬に母をも喪って、一人ぼっちになってしまった。

「あれは死んだ年も計算に入れるさかい、ことしがちょうど三回忌になるんやでエ」

「うん、そやけど別にたいしたことでもけへんし……」

邦彦はトーストを頬張りながら、そう答えた。親戚づきあいも殆どなかったから、邦彦は母の三回忌だからといって別段何をしようとも考えていなかった。母は大晦日の夜に死んだ。底冷えのする長い一日だったことを思い出す。

「ええ会社就職できたらええのになア……」

武内はそう呟きながら、邦彦のいれた珈琲をすすった。

「邦ちゃんの珈琲は独特の味やなア。苦いし、濃いけど、ちょっと舌にもたれへん。……ええ味や」

「卒業でけへんかったら、もう大学をやめてリバーの正社員にしてもらおかなア」

「阿呆、ちゃんと卒業せえへんかったら、この店から追い出したるぞオ」

本気とも冗談ともつかない顔つきで、武内は邦彦をにらみつけた。

「俺はなア、偉うなろうとして頑張ってる若い奴を見てるのんが好きや。まあ何が偉いのんかは別として、大望を抱いてる奴が好きなんや」

同じ言葉を、邦彦はこれまで何度も武内の口から聞いたことがあった。そのたびに何となく居心地の悪い思いをする。偉くなるとか、大望を抱くなどといった言葉は、どこか遠い世界の、自分とはまったく無縁の人間たちの使うものであるような気がするのである。

「マスターは、どうやった？ 若い頃は、やっぱり大望を抱いてたか？」

「ああ、抱いてたでエ。もっとも、自分では大望やと思い込んでたけど、ほんとは小望やっ  
たな。ちっぽけな夢やったよ」

口の中のものを珈琲で流し込むと、武内は煙草をくわえながら川の方を指差した。

「ここからもうちょっと西へ下るとなア、御堂筋を渡ってそのまま真っ直に歩いて行くんや  
けど、幸橋さいわいばしいうのがあるんや。知ってるか？」

聞いたことはあるような気がしたが、邦彦は黙ってかぶりを振った。武内の吐き出す煙が、  
いやに目に沁しみて、邦彦はそれから逃げるようにして川ぞいのガラス窓の所に移った。道頓堀  
川が小さく波立っていた。晴れてはいたが、風が強いようであった。

「戎橋の次が道頓堀橋、その次が新戎橋、それから大黒橋だいこくばしに深里橋ふかさとばしや。ほんでから住吉橋すみよしばしに  
西道頓堀橋、幸橋となるんやけど、その辺の橋に立って道頓堀をながめてると、人間にとって  
いったい何が大望で、何が小望かが判ってくるなア」

邦彦は真鍮しんちゆう製のロックを外してガラス窓をあけ、顔を突き出して川下を見つめた。そこから  
はせいぜい道頓堀橋の欄干ぐらいしか見えないのである。

「とにかく、道頓堀が、何やしらんネオンサインのいっぱい灯ってる無人島みたいに見える  
んや。ああ、俺はあんなところで生きてたんかて、しみじみ考え込んだよ。邦ちゃんも、いつ  
ぺん幸橋の上から道頓堀をながめてみたらええ。昼間はあかんでエ、夜や、それもいちばん賑にぎ

やかな、盛りの時間や」

「そこからこつちをながめたら、いろんなことが判ってくるわけやな？」

「そうや、いろんなことや。花が咲いたり散ったり、夕陽が沈んだり星が光ったりするのを見てるよりも、もっと電撃的啓示を受けるわけや」

邦彦がクスッと笑うと、武内は、

「おっ、ちよつと馬鹿にされたみたいやなア」

と言って立ちあがり、自分の使った皿や珈琲カップを流しのところに運んだ。その時、馴染みの客が五、六人の一団になって入って来た。心斎橋筋に店を持つ商店の主人や番頭クラスの男たちが、仕事を始める前に珈琲を飲んでいく。リバーの客は、午前中はそうした人たちが占められてしまう。午後には一見の客が<sup>いちけん</sup>つづき、夕刻になると<sup>かいわい</sup>界隈のバーやクラブに勤める女たちの一群で満員になる。彼女たちが去ってしまうと、こんどはいつもリバーを待ち合わせの場所に使っている恋人たちがそれぞれに集まってきて、そこでやつとりバーらしい落ち着きと静けさに戻るのである。

「邦ちゃん、もうええから学校に行きや」

と武内が言った。邦彦は洗い場の奥に作られた小さな開き戸をあけた。狭い階段を昇って二階にあがると、万年床の敷かれた天井の低い部屋に入った。そして二、三冊の本を小脇<sup>こわき</sup>にはさ

むと急いで降りて行った。きょうは授業は二つだけだったが、それより就職課に行つて、掲示板に貼<sup>は</sup>り出されている求人カードを見てきたかった。そろそろ本気で就職のことを考えなければならぬ時期に来ていたが、卒業に必要な単位はまだかなり残っていた。大手の企業は、夏期休暇中に殆ど採用の内定をしまつていたので、いま頃になってまだ求人をつづけている会社といへば、社員数も二、三十名に満たない中小企業ばかりであつた。夏休みが終つてからは、邦彦は真面目に講義に出席していた。まち子姐さんに言われたように、母が生きていた時から呑<sup>のん</sup>気に大学に通える身分ではなかつた。女手ひとつでこつこつ貯めた金を、母は邦彦を大学に入れるためにそっくりはたいてくれたのであつた。

「ほかには何もしてやられへんから」

国立大学を落ちた時、母はそう言つて私立の大学に入れてくれた。邦彦はその辛い金を思い、あとたった二年間だから、何とか自力で卒業してしまおうと、母が死んだ時思つたのだった。

邦彦はリバーを出ると、戎橋を渡つて難波の方に歩いて行つた。店開きを始めた商店のシャッターが、大きな音をたてて戎橋筋のあちこちで巻きあげられている。しかしこのミナミのショッピング街は、まだ人通りも少なく閑散としている。

難波駅の南海電車の改札口に、政夫は先に来て待つていた。

「ほんまに徹夜したんか？」

赤い目をした政夫に、邦彦は訊いた。

「朝の四時まで突いとった。きょうはちょっとした金持ちやでエ」

政夫は胸のポケットから紙幣の束を出し、それを邦彦の顔のところまでひらひらさせて笑った。邦彦と同じ歳の武内政夫は、父親の血を引いたのか、玉突きが上手だった。場末のビリヤード場を転々としながら、金持ち相手の賭けゲームでその日その日の小遣いを稼いでいた。父親よりもかなり背が低く貧相な顔立ちだったが、腫れぼったい感じの目許からはどこか不敵なものが絶えず閃めいていた。邦彦は、キューの先にチョークをこすりつけながら次の突き方を思案している際の、政夫のちょっと小首をかしげるさまが好きだった。かもだと読んでいた相手が相当のくせ者だったりしたとき、思わずめらめらと身内にみなぎってきた闘志と幾分かの動揺を、自分でそっと諫めていような風情が、そんな政夫の姿から感じられるのであった。

「邦ちゃんに、おりいって頼みがあるんや」

雑踏をかきわけて歩きながら、政夫が言った。

「きいてくれるか？」

「どんな頼みか知らんけど、いやや、断わる」

これまで政夫から持ち込まれた頼みをきいてやって、あとで後悔することが何度もあった。それで邦彦はわざと冷たく突き放すように言った。他人からそんな言い方をされると、政夫は